



2006年(平成18年)
4月号(No. 731)

社団法人 日本山岳会
The Japanese Alpine Club

定価1部 150円

URL●http://www.jac.or.jp

e-mail●jac-room@jac.or.jp

目次

マナスルへの道③

第二次登山隊とサマ集落問題	1
マナスル登頂50周年イベント	
「THEマナスル——過去から	
未来へ」	4
富士山測候所活用に向けて	5
活動報告	6
海外委員会／緑爽会／アルパ	
インスケッチクラブ	
東西南北	8
日原古道を探る／旧山岳研究所	
を回想して／『ヒマラヤン・ジャーナル』のこと	
「山の環境ネットワーク」に参加	
しませんか	10
図書紹介	11
会務報告	12
ルーム日誌	13
会員異動	13
100周年記念事業 会員募金並びに有志募金の御礼とご報告	14
図書受入報告	14
行事案内	14

▶日本山岳会事務(含図書室)取扱時間
月・火・木 10～20時
水・金 13～20時
第2、第4土曜日 閉室
第1、第3、第5土曜日 10～18時

マナスルへの道③ 第二次登山隊とサマ集落問題

村山雅美

マナスル初登頂50周年を契機に、それまでの道のりを振り返ってみる3回目の企画は、第二次隊のサマでの出来事に焦点を当ててみました。

一次隊の成果を踏まえ、「必ず登る」決意で日本を発った隊員たちは、村人たちに阻止され、結局ベースキャンプにもたどり着けませんでした。

一、二次隊に参加し、1955年秋の三次隊の先遣隊メンバーとしてもサマに向かった村山雅美さんに、江本嘉伸会報委員が話を聞き、まとめてくれました。

88歳の高齢、体調を考えて長時間の語りの負担を避けるため、マナスルの現場で発生した細かな事実は近著『地の果てに挑む マナスル・南極・北極』(05年6月 東京新聞出版局)から引用しています。

サマでの問題は、53年の一次隊の時に起きていた。前年の踏査隊が神聖な山「カンブンゲン(地元住民たちのマナスルの別称)」に登ったため病気が流行した、などの悪い噂が村人たちの間に広がっていた。登頂できずに下山した時、ラルキヤという村でシェルパと住民の乱闘事件が起きた。

「前園を折られて喚く村民。傍らで泣き叫ぶ尼僧。隊員の仲裁では埒が明かず、この地域の裁判権を持つサマの僧院のラマ僧と交渉の結果、負傷者は手当てして慰謝料四十ルピーを支払い、ひとまず解決した。

このとき全財産をはたいてでも現地住民とラマ僧を懐柔し、ボヤの残り火をとことん始末しておけば、翌年のいわゆるサマ事件は起きなかつたのでは、涉外担当の私はいまもなお反省している」(前掲書)

54年の二次隊では、ブリガンダキの谷に入るや、いやな噂が耳に入った。早魃、天然痘の流行、雪崩でゴンパ(僧院)がつぶされ、尼僧が死んだ事故など、すべて昨年日本隊が登ったせいだというのだ。荷物を運んでくれているポーターたちも、あちこちで何かをささやきながら、私たちを見るようになった。不安と脅えがその目つきにあらわれていた。

本隊のメンバーは手前のナムルに留まって、交渉の様子を待つこととした。望みは持っていないが、不調となる公算も大きかったのだ。私と通訳のディリー、サーダーのガルツェンが先頭に、山崎

と二人のシェルパを中間に配し、谷口、松沢が最後尾というかたちでポーターの隊列を組んだ。

サマの手前のロー集落にさしかかると、村人たちの雰囲気は想像以上に険悪だった。私が仲間と先行すると、あちこちで私たちを監視する厳しい視線を感じた。人々はそのうち石を投げつけてきた。口々に叫んでいる。ガルツェンに聞くと「日本人を殺せ」「まだ早い」などと言いつつ合っているらしい。

サマの手前1時間ほどのところにマナスルを見上げる芝地がある。ここで泊まる予定だった。手に手に斧を持った30人ほどの村民が立ちあがり、なだめつつ、なんとか TENT を張る。夕食時間になっても隊のキッチンで働くドルジ少年がいない。なんと村人たちにつかまって、木に縛り付けられているとわかった。サマ出身なのに日本隊で働くとは何事か、と村人の怒りを買ったのだ。なんとか彼を引き取ることはできたが、厄介はそれからだった。

4月6日、サード、通訳とともに渉外担当の私がサマのラマ僧に会いにいった。200人の村人に取り囲まれての交渉は厳しいも



サマ集落はかたく戸を閉じていた（『マナスル』から）

のだった。

「赤い絨毯の席に着いたラマ僧兄弟の前に村人の頭ダ・テンジンほか数人の住民代表と我々が円陣に胡座をかいて会談が始まった。敵意に満ちた空気を弟ラマ僧と、テンジンが煽り、住民たちは「不作や疫病の原因は日本隊にあり」と、前年ラルキヤ集落での日本隊のシェルパと住民が乱闘した際の恨みつらみを口々に言い立て、日本隊の退去をラマ僧に訴えた」

私の英語はディリによってまづネパール語に訳され、次いでガルツェンを通してチベット語に訳されて相手方に伝えられる。その繰り返しだから時間もかかった。

「いらだたしい交渉ははてしなく続く。両手をぱつと広げたり、はだけた胸を拳で叩くといったチベット人特有の大きな身ぶりで観衆は興奮の極に達し、私やサードの首を切る身ぶりも飛び出して大きな歓声が上がった」

やがて、兄のラマ僧が大声で一喝すると、静まり返った。

「ネパール政府に許されても、サマ領域への侵入については実力をもって阻止する」

ヘッド・ラマはこう言い放って席を立った。二次隊がマナスル山域を放浪する惨めな集団になり果てた瞬間だった。

それでもできることはしなければならぬ。スッパに会ってお願ひしようと思えばガルツェン、ディリを連れて二日間シャルコラの峡谷に沿って歩き、チヨコン集落に向かった。スッパとの会見にはサマでの交渉相手だったラマ僧3名も加わった。私はサマでの事件を説明し、ネパール政府の許可をもらっているマナスルに登らせてほしい、と頼んだ。

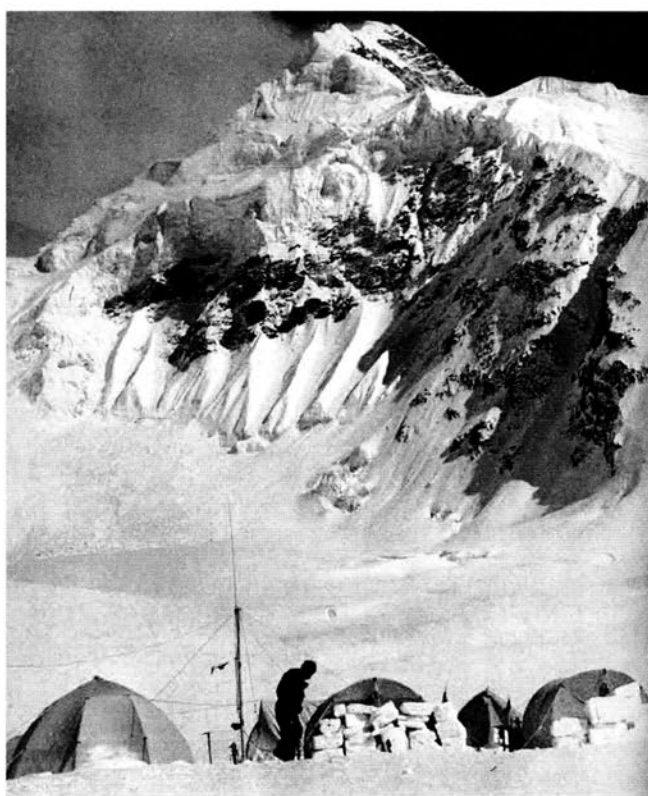
結果は「災厄を呼ぶマナスルは今年には不可。ガネッシュ・ヒマールカヒマール・チュリに限って認

めよう」というものだった。

万事休した。あとできることは「政府の許可証が地方ではなぜ無効なのか」との不満をネパールの外務大臣あてに書いて、飛脚に託すことだけだった。

サマの教訓は、おそらく日本人が現地事情を十分理解しようとしなかったことにあるのだろう。ネパール政府のお墨付きを得たからといって、それが黄門様の印籠のように現地に住む人々すべてに通じるわけではない、という基本的なことを誰もわかっていなかった。やむなく隊はガネッシュ・ヒマールに転進したのだった。マナスルに登りに行ったのだから、別の山に意欲的に向かうことはできなかった。

戦後初めてヒマラヤに向かう登山隊ということで、私たちがわかつていないいろいろなあった。外務省のサートイフィケーションがあるのに、サマの人たちがその通り動いてくれない、というのでこちらとしては大いに不満だった。あとから考えれば、イギリスやフランスなどはヒマラヤ登山のそれまでの積み重ねがあるから、いろいろな対処の方法を知ってい



転進したガネッシュ主峰。手前は第2キャンプ（『マナスル』から）

たが、日本の登山隊はそういう経験を持っていない。日本の外務省にあてたネパール政府の正式な文書があるから、大丈夫と思い込んでいたところがある。

たとえば、スッパと呼ばれる郡の長とラマとの関係をよく理解していなかった。第一次隊の時から勿論シェルパたちはその事情を知っていた、と思う。しかし、それなのに言いたくても言えなかったようだ。言葉の問題もあるが、初めてヒマラヤに来る日本隊に言っ

ても仕方がない、と考えたのかもしれない。日本人が現地の風習、村人たちの心を理解していなかったことが第1の問題だが、その点については、サーダーのギャルツェンはじめシェルパの側にも多少問題があった。

二次隊の失敗を乗り越えてマナスルは三次隊を出すことになった。もうミスは許されない。あらためてネパール政府と交渉して登山許可と「現地住民の友好関係確立」の約束を取り付けた。そして、三

次隊の先遣隊として、55年9月から3カ月、私と小原勝郎（立教大OB）、橋本誠二（北大OB）の3人が派遣された。

前年までの経験にこりて、今度はサーダーを更迭した。新サーダーはガルツェン・ノルブと言い、私たちは彼にサマでの問題について詳しく教え、村のリーダーたちの性格なども伝えた。ガルツェン・ノルブは誠実に役割を果たしてくれた。

サマに行つて、もう話についていると思つていたら、おき火にまだ火がついているような状態だった。それを僧院への寄進などのかたちでなだめ、ついに解決となった。

先遣隊の仕事を終えて帰国した1955年暮れ、西堀栄三郎さんから電話があり、「南極観測を手伝え」と言われた。1957年から58年にかけて実施される「国際地球観測年（IGY）」で、日本も南極観測に参加しよう、という話だった。以後、第三次マナスル登山隊には参加せず、私の仕事はヒマラヤから極地に移った。

いま、マナスルの何年かを通して最も印象に残る情景は？ と聞

かれたら、それは初めて船で降り立ったカルカッタの町、その第一夜に目のあたりにした風景、匂いだ。牛の糞、小便の匂い、薪が燃える匂い。カトマンズもその意味で印象的な町だった。物乞いの人もない高原のうつくしい町。ともに、まさに異文化との出会いだった。

サマで起きた問題は、いわば、その異文化との不慣れな出会いとも言えただろう。

（文責＝江本嘉伸）



1954年の第二次登山隊のメンバー（『マナスル』から）

マナスル登頂50周年記念イベント 「THEマナスル——過去から未来へ」

2月18日、東京・千駄ヶ谷の東京体育館で、マナスル委員会主催の50周年記念イベント「THEマナスル——過去から未来へ」が開催された。マナスル登頂50周年を契機に、今後のヒマラヤ登山を考え、ネパールなど周辺諸国との友好親善の推進を目的とした記念イベントの一環であった。

まずドキュメンタリー映画「マナスルに立つ」の上映があった。この映画は、山本嘉次郎演出、毎日映画社製作の102分にわたるカラー映画で、1956年の第三次マナスル登山隊が、カトマンズ到着から、5月9日の登頂までの模様をつぶさに追ったドキュメンタリだ。

当時は大変な観客数を動員し、日本にマナスルブームが起きるきっかけともなった映画である。森繁久弥のナレーションが大時代的で、妙に懐かしく、ネパール民族の紹介などとても興味深い内容だった。

10分ほどの休憩をはさんで、つ

づいてパネルトークに移った。パネラーは、56年、日本山岳会隊員で二次登頂者の日下田實氏、71年、東京都山岳連盟主催の日本マナスル西壁隊員として登頂した小原和晴氏、74年、日本女性マナスル登山隊で女性初登頂者となった中世古直子氏、97年、明治大学マナスル登山隊で最年少登頂者となった加藤慶信氏の4人。司会はマナスル委員会の大蔵喜福氏が担当した。

まず大蔵氏から、日本山岳会のマナスル登頂によって、ネパールとの間に国交が結ばれるなど日本が国際社会に復帰、その後、登山ブームが訪れたこと、この50年で登山の質が大きく変わってしまったことなどの説明があった。この50年をひとつの区切りにして「自分たちのマナスル」を考えてみたという主旨が話され、パネルトークが始まった。

日下田氏は「登山隊の準備段階から加わったが、山岳会から隊員に推薦されたので、主体的なから



世代を超えて集まったパネラー

わりではなかった」、また、小原氏も「ネパールが鎖国していたり、1ドル360円の為替レートの時代で、ヒマラヤ登山も大変な時代だった」と、当時を振り返って、個人としてヒマラヤ登山に挑むことの難しさが披露された。中世古氏からも、「女性が山岳会に入るのも大変な時代だった」と、当時、女性隊としてのヒマラヤ登山の困難性が話された。

一方で、一番若い加藤氏からは「マナスル登山で人生が変わりました。山に登るために生きていくという覚悟みたいなものが生まれました」という頼もしい声も聞

かれた。

仕事とヒマラヤ登山との両立や個人負担金についても話がおよび、小原氏や中世古氏からは会社をやめて参加したことなど、また個人負担金も当時の金額で大変な額だったことなどの話もあり、ヒマラヤ登山が、まだ一部の人にしか許されていないかった社会状況などが披露された。

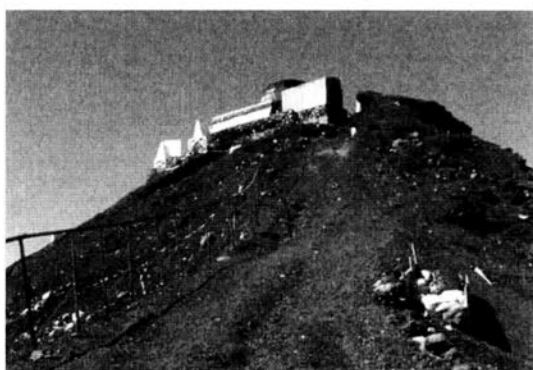
当日は、日下田氏のほかにも56年のマナスル登山隊に参加していた、山田二郎、大塚博美、村木潤次郎、松田雄一氏の長老会員や、その後96年に登頂した石川富康会員も来場しており、トーク前に、大蔵氏によって紹介された。しかし、パネルトークでは、時間の制約もあったからだろうが、彼らの討論への参加はなかった。1956年のマナスル登山隊の当事者であり、貴重な発言も得られたと思うのだが、そうした機会がなかったことが惜しまれる。

また、来場者が1000人ほどで、しかも若い人が少なかったことなどから、もうひとつ盛り上がり欠けてしまい、とても残念な気がした。

(文) 神長幹雄

富士山測候所活用に向けて

堀井昌子



有効活用が模索される富士山測候所

有人気象観測施設としての使命を終えて解体の危機に直面している富士山測候所を、高所科学研究の拠点として有効利用したいと切望する科学者、すなわち大気化学、気象学、環境化学、高所医学、植物生態学、天文学、雪氷学などの研究に携わる研究者が、04年8月に「富士山高所科学研究会」を設立して、これまでさまざまな活動を行なってきた。そのひとつとして研究会が、05年5月17日および6

月26日に静岡および東京でそれぞれ開催した公開シンポジウムでは、参会者の賛同を得て、「富士山測候所をよみがえらせる」「富士山測候所を環境と健康を守る砦にする」「日本のシンボルである富士山の山頂に建つ測候所を世界のために活かす」という3つのアピールを採択した。

その後も引き続き定例的に会議を開きつつ、また山頂施設の見学、実際の研究(高所医学、大気化学)などを行ないつつ、文部科学省および環境省を中心に山頂施設の受け皿の要請を行なってきた。しかし、この受け皿となる機関がないということ、「富士山高所科学研究会」が中心となり、富士山測候所を学術研究・教育等の分野において、広く拓かれた施設として有効活用することを目的として、NPO(特定非営利活動)法人「富士山測候所を活用する会」が設立されることとなった。05年11月27日設立総会を開催、続いて12月26日には設立認証申請書を内閣府に

提出し受理された。本年4月には、認証される見通しと聞いている。

こうした経緯のなかで橋本龍太郎会長には、当初、測候所の無人化が発表された2000年4月より、また、山岳会の会員各位にはその時々温かいご支援をいただいていた。山岳4団体三役懇談会の席や、あるいは会報「山」においてこの研究会の紹介の機会を与えていただいた。また、平山善吉会長には申請中のNPO法人の理事就任を快く受けていただいている。

3月4〜5日、NPO法人富士山測候所を活用する会(申請中)が主催し、富士山高所科学研究会共催、大成建設自然・歴史環境基金、大成建設株式会社、三菱電機株式会社、富士急行株式会社の協賛を得て、「富士山測候所国際シンポジウム」が、学士会館において開催された。極地高所研究施設としての学術的活用案について、スイス・モンテローザ峰のマルガリータヒュッテで研究をしているハイドルベルグ大学のピーター・ペルチェ教授、中国・長白山で大気化学の研究をしている韓国・漢陽大学の金潤信教授、さらにハワイ・

マウナロア山で大気化学の観測をしているアメリカ海洋大気庁全球ネットワーク観測責任者のラッセル・シュネル博士ら3人の研究者を迎え、海外における先進的な研究概要を学ぶとともに、富士山測候所の科学技術振興や発展にかかわる国内研究者同士との情報交換も行ない、富士山測候所の新たな役割と使命を確認した。

最後に、会場で「国際極地高所科学研究ネットワーク構築」に対し、「よみがえれ富士山測候所・アピール宣言」が5つの項目において掲げられたことを報告する。

中央アジアトレッキングとサマルカンド9日間 7/4〜7/12
レーニン峰トレッキングと世界遺産サマルカンド

¥445,000

スーパーカイルス28日間 9/25〜10/22
カマンズ〜チベット〜カシュガル〜クレジラフ峠〜イスラマバード

¥720,000

Wec 株式会社ウェック・トレック
国土交通大臣登録旅行業1662号/日本旅行業協会正会員

〒105-0003 東京都港区西新橋3-24-8山内ビル4階
電話 03-3437-8848 E-MAIL info@everest.co.jp

活動報告

日本山岳会の
各委員会、同好会の
活動報告です

海外委員会

講演会「パミール最奥部 に行く」

3月2日、学習院百周年記念会館で、パミール最奥部・タジキスタン南西部を踏査した本多海太郎氏と井手マヤ氏（故・田口二郎副会長の長女で、やはり冒険心は争えない）を講師に迎えて、パミール最新事情の講演会が開催された。当日は雨にもかかわらず、秩父宮記念山岳賞受賞の平位剛会員をはじめ、ジャーナリストや地域に関心の高い62名が集まった。

踏査はサマルカンドから始まり、ドシャンベール・ホログ・イシユカシム・ゾルクル（ビクトリア湖、北岸は日本人初踏査）・ムルガブ・カラクル・オシュ、そしてタシケントに終わる「パミール大周遊」と呼ぶに相応しい1カ月に及ぶも

のであった。

当日の報告の中からいくつかを紹介したい。まず参加者の興味をひいたのは温泉の話である。パミール最奥部のシルクロードに、温泉街道と呼べるほど随所に温泉が湧き出ているのである。温泉は主にサナトリウム（病院）の役目をしているが、2人は温泉好きらしく、実際に食欲と言えらるほどこまめに入浴した。特にムルガブでは、休養のため湯治のように温泉を楽しんだ。

今回の踏査の後半部は、国境が複雑で、政情がまだ不安定なフェルガナ盆地を緊張しながら通過、近年日本人がほとんど入っていない、最新のフェルガナ盆地の様子を報告。旧ソ連時代は誰にでも仕事があり、辺境地域の人々にもそれなりの役割分担があつて働き口もあり、電気・水道といった社会基盤が充実していたが、今は全く



本多海太郎氏と井手マヤ氏を迎えての講演

なくなつてしまつてゐる。そのため旧ソ連は良かったと懐かしむ人々が多いことも報告された。

諸外国の支援の関わり方だが、中国はエネルギーの確保のために、かつてのカラコルムハイウェイ建設と同じように、今度はタシケントと同じように、今度はタシケントから西に通じる道路建設を進めているし、アガ・ハーン財団とフランスのNGO・Actedが大きな力を持つてゐる。Actedはエコトリズムの教化、民宿の指導と経営を行なつていて、その地域も広範囲にわたり、ムルガブからオシュまでの12日間はこのActedの民宿やユルトに宿泊したほどである。また、ドイツは温泉を利用

したトマト栽培の施設を提供しているなど、2人はこの地域に対する日本の支援の遅れを痛感させられたと慨嘆している。

1カ月の間、全体にかつての記録ほど寒さはひどくなかつたが、高地は天気恵まれず、中国国境付近ではムスターグアタも望見できなかった。

パソコンを使って地図、旅程、風景、風俗、地域の状況が映し出され、緻密な構成の報告会は、盛況のうちに終了した。2人は、今夏もまた更に深部の踏査を計画しており、次回の報告に期待したい。

（絹川祥夫）

緑爽会

映画と講演の集い

2月16日13時からJACC会議室で宮下啓三会員（ドイツ文学者）の解説付『アルプスの山の娘』の映画会が開催された。

解説の後、映画はまず、日本製アニメ『ハイジ』の冒頭部分から始まった。原作を読まない人でも日本中を沸かせたテレビの人気番組は記憶しているはず。事前に、アルプスの山とアルプ（草原）の



宮下啓三氏の解説を受ける参加者 (撮影＝里見清子)

描き方に注目するようにとの説明があり、次にハイジが暮らしたマインフェルト付近の山岳地帯を歩く、スイス一家の記録映画が上映された。そこにはアニメの画面とは違う厳しい山と谷、そして傾斜地の村が写し出された。

続いて1952年制作のスイス映画『ハイジ』。同じくオープニングのみ鑑賞する。ハイジがおじいさんの小屋で目覚めるところから始まっていた。その後、1965年版のオーストリア映画を通して見る。原作では19世紀末の話を、20世紀に移し変えている。

なく、フランクフルト空港の飛行機もジェットだったりとまどいがあった。字幕も吹き替えもない映画だが、弁士、宮下講師のたぐみな声色で、よく理解できた。原作通りでないからといって驚くにはあたらない。この日は時間切れで上映できなかったが、今世紀になってスイスTVが作ったパロディでは、都会へ連れていかれたハイジと山のペーターとがパソコンで交信するのだそう。繰り返して映画・TVになるのは、それだけ『ハイジ』に変わらない人気があるからだろう。

この日の集会は『山』に予告したため、緑葉会会員以外の参加も多く、遠く山梨、長野、新潟から駆けつけた人もいて満員の盛況。『ハイジにこれだけ集まるとは、山岳会が高齢化でなく幼児化したのではないかと、講師が冗談をいうほどだった。映写を担当した羽田栄治会員に感謝します。

(松本恒廣)

アルパインスケッチクラブ

第15回「山好きの山の絵展」

第15回「山好きの山の絵展」は、



盛況だった「山好きの山の絵展」の会場

2月19日から25日まで、有楽町・東京交通会館2階ギャラリーで開催された。

雨模様の日が多いにもかかわらず連日盛況で、会期を通して2300名あまりの入場者を数えた。出展は55名による71作品で、スケッチブックも10冊が展示された。会員各自の山行から選んだ作品テーマは、国内各地からヨーロッパ、中国、東南アジアへと広がり、技法も水彩、油彩、パステル、版画などと多彩であった。

会場に備えたアンケート用紙への記入も多く、鑑賞後の感想に加えて、「ホームページで馴染みの名前の作品を拝見しました」「次回の

案内状を送ってください」などの書き込みから、固定ファンができてくることが感じられ、会員を喜ばせた。

出展作品はホームページで観ることができる。閲覧方法は「JACのホームページ」↓「同好会」↓「スケッチクラブ」だが、最初から「アルパインスケッチクラブ」と入力し検索してもヒットする。

なお、第12回展以降の出展全作品を見ることができる「アーカイブス」(保存展示所)についても近日公開の予定である。(田中正雄)

キリマンジャロに行こう! 説明会

昼の部/14:00～16:00						夜の部/18:30～20:30						〈予約制〉													
ゲストスピーカー/ニカス・ダミアン・グさん(チーフ・登山ガイド)来日																									
東京	5月12日(金)						昼と夜						大阪	5月10日(水)						昼と夜					
	アルパインツアー本社説明会場													大阪科学技術センター403号室											
名古屋	5月11日(木)						夜						福岡	5月9日(火)						昼					
	国際センター3階 第1研修室													天神ビル 11階 会議室											



国土交通大臣登録旅行業第490号/日本旅行業協会正会員 日本コンパニオン

〒105-0003 東京都港区西新橋1-12-1 西新橋1森ビル2F ☎03-3503-1911
大阪 ☎06-6444-3033 名古屋 ☎052-581-3211 福岡 ☎092-715-1557
e-mail: info@alpine-tour.com http://www.alpine-tour.com

東 西 南 北

日原古道を探る

清水長正

昔日の山の人たちが往来していた古道を奥多摩(氷川)～日原間に探ってみた。

日原へのバス道路(日原街道)

が開通する1951(昭和26)年以前には、途中の大沢から日原川右岸側の旧道が歩かれていたことが、戦前の山の紀行などに散見される。ところが、眞鍋健一『日原を繞る山と谷』(朋文堂、1942年)や、宮内俊雄『奥多摩』(昭和刊行会、1944年)によれば、さらに古くに尾根上を大きく高巻く古道があったという。このわずかな情報を頼りにルート探索を試み、昨秋11月に有志と旧道・古道の踏査会を実施した。

旧道は、1821(文政4)年

会員の皆様のご意見、エッセイ、俳句、短歌、詩などを掲載するページです。どしどし投稿ください。(紙面に限りがありますので、1点につき1000字程度をお願いします)

の『武蔵名勝図会』に山ノ神付近の峡谷風景が描かれていることから、開削はそれ以前である。山ノ神までは谷壁の上部をトラバースしていて、眺めのいい場所もあり、清水峠の旧道のような風情がある。山ノ神は道より一段高い石垣の上に朽ちた祠として残っており、明治20年、大正8年、昭和12年の3枚の木札が納められていた。そこから先が足元100メートルもある断崖を通過する難所で、旧道は落石におおいつくされ、ほとんど通行不能である。峡谷を挟んだ対岸に、かつてトボウ岩がそびえていたが、今では大規模な石灰岩採掘地となっている。

古道は、山ノ神付近の峡谷を迂回して尾根を越えるルートで、小菅の伽藍神社の石段に登り口となる。神社の上のお堂の前に1745(延享2)年の石碑があり、そ



山ノ神尾根

の頃まで古道が歩かれていたのかもしれない。初めのうちは植林の仕事道のようなが、小菅山から延びる広い尾根上に取り付くと、道が掘りこまれ古道の雰囲気を感じられる。植林の中に細長い標石(日原川流域にない御影石で人が担ぎあげたもの)を見つけ、ひょうたん石と命名。日原への古道はいく筋かあったようで、ここがその分岐点とみなされる。右のトラバース道へ入り、山ノ神尾根を過ぎてからは急斜面を横切る獣道のように

に細々としてくる。岩壁やガリーの通過箇所でもルートも不明瞭になりがちだが、一部では路肩の石積みも残されていた。タル沢右岸の尾根でいよいよルートを失い、岩屑の斜面をタル沢へ適宜下降。

タル沢には奥多摩でも最大級のワサビ田が広がっていたが、2001年9月10日の台風15号で土石流が発生し壊滅してしまった。その下流には1932(昭和7)年の旧道整備によるコンクリート製の樽沢橋が残っていたが、これも流失した。土石流跡に新しい砂防ダムが建設され、その作業道をたどり日原川の河畔に下って旧道と合流。釣り橋(戦前の本では無妙橋)で日原川を渡り、最後のひと登りで日原へ。

小菅～日原間は3時間余りの行程で、日原の先人の労苦が偲ばれるルートであった。

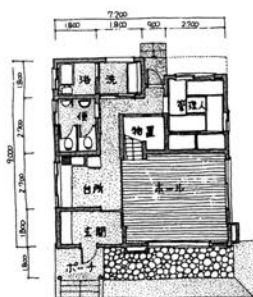
旧山岳研究所を回想して

早乙女緩次

「山岳」88年の表紙絵に「旧、上高地山研」がある。現在のような

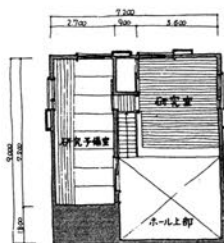


鳥瞰図



平面図

東京芸術大学建築科教授 山本学治



屋根裏平面図

風格もなく、平面積約20坪、天井の低い屋根裏約14坪に宿泊できるようにと、かなり工夫された建物だ。この詳細は『山岳』70年に、山荘建設委員の山崎安治さんが記している。

設計者は東京芸術大学建築科教授の山本学治さんである。この施設に地元会員として手伝った私に、山本さんから連絡があり、「私は建築の講義と研究を行ないますが、世間に通用する資格登録は行なっていないせんから、地元の有資格者名をお借りして建築確認・許可などを取得して下さい」との事であった。

関係者の中で一番若かったのが私で、2番目が確か山本先生だった。度量衡が一大変革されて間もなくであったので、若かった私ですらも「平米」に慣れるのに閉口したが、山本さんは職業柄、すぐに順応されておられたように思う。資格登録の件に関しては、「日本でこの分野のおもしろいのは、建築史なのです」と言っておられた。その先生は、数年後に亡くなられたが、どうやら退官後は建築の歴史家にもなりたかったのではないだろうか。

今、建築に関することが社会で騒がれているが、ここで説明して

おきたいのは、当時は役所の建築主事が確認事務を直接扱っていたので、私は行政上、安曇村を管轄する豊科町の県事務所へ出向いて取得したということである。この件では山岳会本部からは催促され、ついには着手から3年もの歳月を要した。今、そのことを懐かしく思い出すのである。

『ヒマラヤン・ジャーナル』のつづ

鈴木正規

ヒマラヤ (Himalaya) は、山岳地域の総称として使われる言葉である。もともとはサンスクリット語で「雪の棲家」の意味を持つ。

ヒマラヤ山脈は広範囲なアジア山岳帯をなし、8000メートル以上の高峰が14座、7000メートル以上の山が350座以上もあり、ヒマラヤはまさに「世界の屋根」ともいえる。

ヒマラヤの文献の一部である、『ヒマラヤン・ジャーナル』はヒマラヤン・クラブの機関紙である。同クラブ創立の構想は1866年に、D・フレッシュフィールドの

胸の中に生まれ、1927年にL・コールベットが世界中の登山家に趣意書を発送した。その結果、1927年9月、カルカタでThe Mountain Club of Indiaという会が創立され、1928年10月14日、一本化された今のヒマラヤン・クラブが正式に発足したのである。

また同時に『ヒマラヤン・ジャーナルVol.1』が発刊されて、今日でも価値の高いヒマラヤ登山、学術調査の雑誌としてヒマラヤ登山者の必読書になったのである。

第二次大戦から今日にいたるまでのヒマラヤ登山の黄金時代には、8000メートル峰が次々と初登頂され、7000メートルの山々もほとんど登頂された。今日では困難なバリエーションの時代になり、これまでとは違う尾根や、より困難な壁の登攀の時代に入った。

この『ヒマラヤン・ジャーナル』は1940年の戦争により一時中断されたが、46年には再刊された。正確で詳細な優れた内容に富んだ会報として、世界の登山家の人々に愛読されている。創刊当時から発行部数が極めて少ない。1〜15号までは、入手困難な稀観本になっている貴重な機関紙である。

「山の環境ネットワーク」に参加しませんか

自然保護委員会

入山のアクセスが便利になり登山の大衆化が進むにつれ、山の利用者が引き起こす環境問題が大きな社会問題になってきています。一人ひとりは罪の意識がなくても、有名な山に登山者や観光客が集中することによって、結果として、山の自然に大きなダメージを与えているのは事実です。私たちは、山の利用者として山から一方的に恩恵を受けるだけでなく、愛する山がいつまでも美しく豊かであり続けるよう、自らもできる努力はしなければならないと思います。自然保護委員会では、本問題を今後日本山岳会が重点的にとり組むべき自然保護活動の柱のひとつと考え、「山の環境ネットワーク（通称：山環ネット）」を発足させることにしました。

「山環ネット」の特徴

「山環ネット」は特定の地域の人しか参加できない集会型組織ではありません。その名が示すように、北は北海道から南は九州・沖縄まで、問題意識を持った全国のJAC会員が誰でも参加でき、効果的に活動できるよう、ホームページと団体型ブログを中核ツールにしたネットワーク組織で運営します。

もうひとつの大きな特徴は、JAC内部だけの活動に留まらず、積極的に外部にも発信していくことによって社会貢献したいということです。そのために、関係省庁や外部団体との連携も積極的に考えていく必要があるでしょう。いま日本山岳会は、日本を代表する山岳団体として社会的責任を果たすことが期待されています。

取り上げるテーマ

(当面は次の3テーマでスタートします)

*高山植物部会 (部会長・樋口みな子)

全国各地で高山植物の盗掘や踏み荒らしの問題が後を絶ちません。ストックによる害も深刻

になっています。氷河時代の生き残りといわれる高山植物の保護運動を、地域問題から全国問題にしていかなければならないと思います。

*山のトイレ部会 (部会長・森武昭)

山のトイレの問題は、受け入れ側だけでなく登山者にとっても大きな悩みです。環境省も本腰を入れて取り組んでおり、民間の専門団体もありますが、私たちは、全国の山をくまなく歩いている山の利用者の立場からこのトイレ問題に取り組みます。

*登山道部会 (部会長・宮崎幸博)

有名山岳への登山者の集中が主たる原因になって、各地の登山道の荒廃が激しく、登山道の修復のやり方にも問題が多いと思います。現状を調査し、問題点を解析し、登山者の目で見、登山者の立場で考え、解決方法を探っていきたいと思います。

なお、上記のほか、商業登山、適正利用の2テーマについても、準備中です。

運営体制

このネット組織を効果的に運営するために、代表(山川陽一・自然保護委員長)と事務局(富沢克禮・自然保護委員)を設けます。

参加者募集

参加希望者は、希望部会を指定し、会員番号、氏名、電話、FAX、メールアドレスを添えて、下記へ申し込んでください。

全国の会員みなさんの積極的参加を期待しています。

(申し込み先) 富沢克禮

TEL & FAX 042-324-4050

✉: tomizawa-katsunori@nifty.com

本書の著者はスポーツの宮様として親しまれ、昭和28年に薨去された本会名誉会員の秩父宮殿下である。

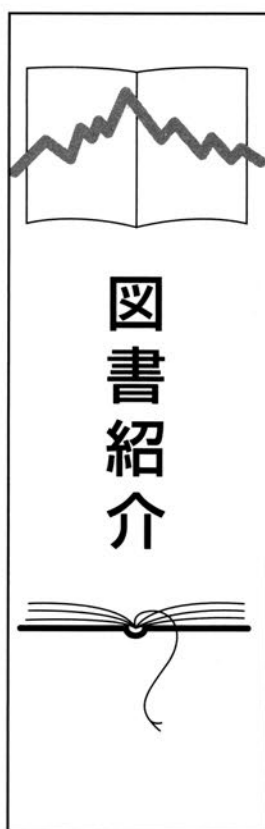
当時、皇族が新聞・雑誌に文章を発表されたことは画期的なことに違はなく、その思うところを自由に書き綴られていて、読者は一読してその率直で明朗なもの言いに驚かれるに違いない。

そこには日本が敗戦の混乱から、独立国としてその未来に明るい希望



2005年12月
渡辺出版刊
四六判 248頁
定価 4400円

『皇族に生まれて』
秩父宮随筆集
秩父宮雅仁親王・著



図書紹介

望を持ち得た時代の背景があるのかもしれない。いずれも昭和20年代半ばの文章だが、現在読んでも色あせておらず、編者が今これらを一冊にまとめて発刊を企てたのも不思議ではない。

本書は5章で構成されており、1章では私たちの伺い知ることのできない貴重な宮様の生活・思い出を知ることになる。筆者は本書を紹介する任にはないが、秩父宮記念山岳賞創設時に総務理事として関わった者として、会員諸氏には3章の山とスポーツに関わるなから登山に関する随筆の一端を紹介しよう。

「スポーツと私」では「私はスポーツを心から愛する」いろいろなスポーツをしたがなんといっても山のスポーツ、登山とスキーとにまず指を屈する。山に登った人々の話を見聞するにおよんでは、雪溪のある山々にと心が走るのを押

さえられないものがある」と、山への愛情が語られる。

「山は山に登ったものだけが、その美しさを味わえる」から始まる昭和2年の夏の穂高の思い出は、その描写が生生きとして美しい。

「山登りは山頂を極めるだけが目的ではなく、山に登ることそのものに大いなる意義を認めるのであるのだから、天候などでかりに山頂に達することができなくても、我々は充分に満足を感じるのだらう」とある。

また、「対山漫語」にはJACの大先輩たちの名が次々と登場して

楽しい。

著者は、本会の秩父宮記念山岳賞に名を残し、山を愛した宮様として長く語り継がれていくことであらう。

本書は著者が清々しく凛々しい生き方で、その生涯をフェア・プレイの精神で貫かれたことを偲ばせる。

その登山暦は、5章の資料「御登山年表」に詳しい。

(絹川祥夫)

日本山岳会創立百周年記念出版



日本全国四〇〇〇山の
情報を網羅!

増刷出来!!

新日本山岳誌

日本山岳会・責任編集

菊判(1992頁)上製/クロス装/カバー掛け/函入り 定価18,900円(税込)

捉拮・国後など北方四島の山から、南西諸島の山々まで、日本全国の山に登った、撮った、調べた、そして書いた。日本山岳会の全国25支部約500名が総力をあげて編集執筆にあたった最新・最大の山岳百科がついに完成!

△ 推薦のことば △

日本山岳会二代会長高頭式氏による「日本山岳誌」から百年、山岳の現況を記述し後世に残すべく、百周年記念事業として本書ができました。

日本山岳会会長 平山 善吉

ナカニシヤ出版

〒606-8161 京都市左京区一乗寺木ノ本町15番地
Tel.075-723-0111 Fax.075-723-0095
URL <http://www.nakanishiya.co.jp/>

会務報告

3月理事会

日時 3月8日 18時30分～20時

20分

場所 日本山岳会会議室

【出席者】平山会長、平林・橋本・田邊各副会長、吉永・賛田各常務理事、石田・篠崎・大蔵・野口・斎藤・藤井・石橋・古野各理事、山本監事、小倉・重廣・今村各常任評議員

【委任】渡邊理事、一力監事

●議事に先立ち、財務委員「公益法人会計基準」改定対応プロジェクト・チームの平井拓雄会員より、2月22日と28日に実施された趣町税務署の税務調査結果、および会計基準改定に伴う減価償却について報告があった。

【審議事項】

- 1 創立100周年記念事業関連
- (1) 収入状況(18年2月末現在)
1億179万6784円(内募金等 7066万8229円)

- (2) 支出状況(18年2月末現在)

6474万8529円

- (3) 3月繰越金 3704万8222円

寄付金の免税措置適用が3月末

日までのため、3月中に予定されている寄付金の免税措置について、遺漏のないよう対応する。

- 2 平成18年度事業計画(案)および収支予算(案)について

総務担当の吉永、財務担当の賛田各常務理事より説明があった。事業計画(案)については2、3年後に予想される「公益社団法人」への移行を見据えた「公益事業」と「会員のための事業」の区分を行ない、収支予算(案)については会員減に伴う収入減に対応した緊縮予算とした。

- 3 定款の一部改定(案)について

①定款第13条「理事定数を10名以上15名以内とする。」

- ②定款第50条「施行を平成19年4

月1日よりとする。

平成17年度からの組織改革に伴い、理事の委員長兼任の廃止、および会運営の意思決定の迅速化を図るため、理事定数を減員することとした。今後、評議員会の意見を聞き、平成18年度通常総会に提案する。

- 4 監事1名の辞任願いの扱いについて

2月28日、一力英夫監事より退任願いが会長宛に提出された。受理を前提として、定款第20条第4項による新監事就任までの職務執行をお願いし、通常総会における新監事の選出を行う。

- 5 当面の運営方針について

施策の具体策を含む「当面の運営方針」を提示した。そのうち、事務局強化策としての「事務局長」の設置、および年次晩餐会の地方開催(18年度は東海支部所管で、名古屋地区を予定)について、人選、準備を急ぐ。

- 6 名誉会員推薦等に関する内規改定について

常務理事会において検討した理事会案を評議員会に提示し、先に提出された評議員会案との調整協議を行なう。第1回は3月25日。

(承認)

- 7 公益法人改革の概要について

文部科学省より改革(案)概要が示された。改革法案は3月10日に閣議決定され、今年度通常国会において成立する見込み。平成20年度中に施行される予定だが、本会としては「公益社団法人」を目指す。

- 8 所蔵写真の掲載許可願(株神戸新聞総合出版センター

「ウェストン夫妻と上條嘉門次、根本清蔵」の写真(承認・有料)

- 9 名義後援:NPO法人セブン

サミツ持続社会機構
マナスル・富士山同時清掃登山

- 10 名義後援(承認・誓約書

の名称後援
【報告事項】

- 1 2月11日 100周年記念

「第2回シンポジウム」(重廣) 皇太子殿下がご出席になり、約80名の参加者があった。(別紙により報告)

- 2 2月18日「THEマナスル

過去から未来へ」(田邊) 初登頂50周年記念事業の一環として実施、当時の隊員を含む約100名の出席者があった。

- 3 2月24日 18年度予算編成会

議(吉永)

16の委員会委員長より17年度事業実績、および18年度事業計画についてのヒアリングを行なった。今回がはじめての試み。

4 2月25・26日 支部長・支部事務局担当者会議 (吉永)

山梨支部と共管で山梨県・人材開発センターで実施。特に北海道、東海、宮崎各支部からの各種公益的の事業についての報告が目ざされた。

5 2月22日・28日 麹町税務署の税務調査 (吉永)

特にイベント時の講師謝礼等に対する源泉徴収、および委員会の交通費について厳しい指摘があった。4月上旬までに対応する必要がある。

6 3月5日 日本・ネパール国交樹立50周年記念協力会発足総会 (田邊)

「交詢ビルディング」において開催され、66団体が参加。名誉会員に川喜田二郎氏、会長に橋本龍太郎氏が就任した。

7 3月7日 104号室完成披露、午後の部約40名、夕刻の部約10名が参加した。

8 環境省「吉野熊野国立公園西大台地区利用適正化計画検討協議

会」への参加 (篠崎)
このたび正式メンバーとして参加することが決定。今後は篠崎理事が関西支部と協力して提言していく。 以上

ルーム日誌 3月

- 1日 事業委員会 山岳地理クラブ
- 2日 フォトビデオクラブ
- 6日 総務委員会
- 7日 図書委員会 財務委員会
- 8日 アルパインスケッチクラブ
- 9日 学生会 山の自然学研究会
- 13日 100周年記念募金委員会
- 14日 アルパインスキークラブ
- 15日 山研委員会 インターネット小委員会 アルパインスケッチクラブ 九五会
- 16日 三水会 つくも会
- 17日 科学委員会
- 20日 図書委員会
- 22日 資料映像委員会
- 23日 海外委員会 麗山会 ゆきわり会
- 24日 自然保護委員会 山遊会
- 25日 常務理事会
- 27日 評議員会
- 百年史委員会

28日 委員長会議 インターネット小委員会 アルパインスキークラブ 00会

会員異動 (3月)

3月来室者588名

- 横江一郎 (4047) 05・12・21
- 清水朝一 (10715) 06・1・22
- 東浜義男 (1834) 06・2・8
- 美甘百々子 (8527) 06・3・3
- 楠田和彦 (13994) 06・3・11
- 堀越昇 (11426) 06・3・15
- 小谷隆一 (4102) 06・3・23
- 小西喜助 (6957) 06・3・23
- 今井喜美子 (3019) 06・3・27
- 退会
- 成蹊大学山岳部 (1043)
- 田中邦彦 (3423) 関西
- 高野晶三 (6393)
- 大石博 (6455) 東九州
- 宮原博通 (6682)
- 坂上義次 (8865) 関西
- 牧野宏 (8931) 関西
- 前田芳一 (9538)
- 谷口凱夫 (10073) 富山
- 太田和利 (10260)
- 嶋崎直忠 (10495)
- 河内正樹 (10587)
- 折原榮悦 (10673) 山形



ATLAS TREK

個人手配旅行から人気のトレックツアーやエクスペディションのアレンジまで。充実度が違う「旅」のプランニングをここが得意です。山旅などあらゆるジャンルを取り扱っています。お気軽にご連絡ください。

株式会社 アトラストレック
(国土交通大臣登録旅行業1167号)

東京/〒160-0008 東京都新宿区三栄町25 三栄ハウス202 TEL 03-3341-0030
大阪/〒540-0012 大阪市中央区谷町3-4-5 中央谷町ビル501号 TEL 06-6946-9111
名古屋/〒464-0807 名古屋区千穂区東山通り5-113 オークラビル6F TEL 052-788-2422

- 萩徹 (10827) 東海
- 津田友枝 (10864) 東海
- 関喜代司 (10899) 関西
- 藤田元弘 (11037) 東海
- 林芳弘 (11094) 東海
- 松下二郎 (11734) 東海
- 上野智四子 (11829) 信濃
- 金谷昭 (12095) 京都
- 島村一男 (12474) 京都
- 島村チヨ (12475) 京都
- 大井喬 (12502) 関西
- 河野孝弘 (12567) 北九州
- 高成玲子 (12570) 富山
- 林貞行 (12611) 富山
- 吉田健二 (12653) 関西

大西秀夫 (13096) 山形
後藤孝司 (13470) 山形
新名雅子 (13798) 宮崎
竹藤大吉 (13868) 福岡
林原弘 (13922)
小野亜矢子 (13935)
終身会員
林 稔 (6165)

100周年記念事業

会員募金並びに有志募金の御礼とご報告(10)

募金委員会

左記の企業、団体、会員より募金をお寄せいただきました。企業名、団体名、会員名を記載し御礼とさせていただきます。

1. 法人募金(3社)

(株)協立建築設計事務所、大成建設(株)、岩崎電気工事(株)

2. 有志募金

3万円以上 (1団体)

渡辺兵力さんを偲ぶ会

1万円以上 (1名)

鈴木耕治

3. 会員募金

9千円 (3名)

青木敏雄、河野孝弘、井上一鷹

(敬称略、3月末現在)

図書受入報告 (2006年3月)

著 者	書 名	ページ・サイズ	出版元	刊行年	寄贈/購入別
日本山岳会富山支部(編)	ギャジ・カン峰登山報告書2005——日本山岳会創立100周年記念	43pp/26cm	日本山岳会富山支部	2006	発行者寄贈
久我慧子・他(編)	山嶺——宮崎支部創立20周年記念誌	130pp/30cm	日本山岳会宮崎支部	2006	発行者寄贈
日本山岳会京都支部(編)	支部だより No.82——京都支部創立20周年記念号	117pp/26cm	日本山岳会京都支部	2006	発行者寄贈
日本山岳会信濃支部(編)	復刻・日本山岳会信濃支部報(第1号~45号)	790pp/27cm	日本山岳会信濃支部	2005	発行者寄贈
京大探検者の会(編)	京大探検部(1956-2006)——京大探検部創設50周年記念出版	511pp/20cm	新樹社	2006	出版社寄贈
50周年記念誌編集委員会(編)	50年の歩みと仲間たち——埼玉県山岳連盟創立50周年記念誌	271pp/30cm	埼玉県山岳連盟	2005	発行者寄贈
蜂須賀正氏	南の探検(平凡社ライブラリー No.570)	481pp/16cm	平凡社	2006	出版社寄贈
小林尚礼	梅里雪山——17人の友を探して	303pp/21cm	山と溪谷社	2006	出版社寄贈
河野利晴	魅せられて大山——春花秋冬DAISEN	58pp/15cm	河野利晴(私家版)	2005	著者寄贈
高木應光	神戸スポーツはじめ物語	254pp/19cm	神戸新聞総合出版センター	2006	出版社寄贈
笹本長敬(編訳注)	山——西洋人のアンソロジー	324pp/23cm	英宝社	2006	著者寄贈
江嵩一夫	足裏をひるがえして	82pp/21cm	江嵩一夫(私家版)	2006	著者寄贈

行事案内

◆「徳本峠越えとウエストン祭」

山研委員会・信濃支部

島々谷から徳本峠を越え新緑の上高地に入ります。山研に宿泊して、翌日は「碑前祭」に出席。会員の仲間作りを手助けします。特に新入会員の参加大歓迎です。

日程 6月3日(土)~4日(日)

費用 1万円(1泊2食、記念品、保険料を含む)

対象 17年度入会者、および本会

申込 5月15日までに電話かFAXで堀嘉余子宛(TEL & FAX 03-33303692)

申込 5月15日までに電話かFAXで堀嘉余子宛(TEL & FAX 03-33303692)

申込 5月15日までに電話かFAXで堀嘉余子宛(TEL & FAX 03-33303692)

申込 5月15日までに電話かFAXで堀嘉余子宛(TEL & FAX 03-33303692)

申込 5月15日までに電話かFAXで堀嘉余子宛(TEL & FAX 03-33303692)

申込 5月15日までに電話かFAXで堀嘉余子宛(TEL & FAX 03-33303692)

申込 5月15日までに電話かFAXで堀嘉余子宛(TEL & FAX 03-33303692)

申込 5月15日までに電話かFAXで堀嘉余子宛(TEL & FAX 03-33303692)

申込 5月15日までに電話かFAXで堀嘉余子宛(TEL & FAX 03-33303692)

申込 5月15日までに電話かFAXで堀嘉余子宛(TEL & FAX 03-33303692)

申込 5月15日までに電話かFAXで堀嘉余子宛(TEL & FAX 03-33303692)

申込 5月15日までに電話かFAXで堀嘉余子宛(TEL & FAX 03-33303692)

申込 5月15日までに電話かFAXで堀嘉余子宛(TEL & FAX 03-33303692)

行程

時15分(7時新宿発特急あずさ号が便利)

上諏訪駅(バス)→三峰山→和田峠→鷲ヶ峰→八島湿原(打上げ式)→(バス)上諏訪駅

費用 1000円

申込 5月20日までにbunsui@bunsui.co.jp、またはハガキかFAXで平野彰宛(TEL 330-0065)

申込 5月20日までにbunsui@bunsui.co.jp、またはハガキかFAXで平野彰宛(TEL 330-0065)

申込 5月20日までにbunsui@bunsui.co.jp、またはハガキかFAXで平野彰宛(TEL 330-0065)

申込 5月20日までにbunsui@bunsui.co.jp、またはハガキかFAXで平野彰宛(TEL 330-0065)

申込 5月20日までにbunsui@bunsui.co.jp、またはハガキかFAXで平野彰宛(TEL 330-0065)

申込 5月20日までにbunsui@bunsui.co.jp、またはハガキかFAXで平野彰宛(TEL 330-0065)

申込 5月20日までにbunsui@bunsui.co.jp、またはハガキかFAXで平野彰宛(TEL 330-0065)

申込 5月20日までにbunsui@bunsui.co.jp、またはハガキかFAXで平野彰宛(TEL 330-0065)

申込 5月20日までにbunsui@bunsui.co.jp、またはハガキかFAXで平野彰宛(TEL 330-0065)

申込 5月20日までにbunsui@bunsui.co.jp、またはハガキかFAXで平野彰宛(TEL 330-0065)

申込 5月20日までにbunsui@bunsui.co.jp、またはハガキかFAXで平野彰宛(TEL 330-0065)

申込 5月20日までにbunsui@bunsui.co.jp、またはハガキかFAXで平野彰宛(TEL 330-0065)

申込 5月20日までにbunsui@bunsui.co.jp、またはハガキかFAXで平野彰宛(TEL 330-0065)

申込 5月20日までにbunsui@bunsui.co.jp、またはハガキかFAXで平野彰宛(TEL 330-0065)

申込 5月20日までにbunsui@bunsui.co.jp、またはハガキかFAXで平野彰宛(TEL 330-0065)

申込 5月20日までにbunsui@bunsui.co.jp、またはハガキかFAXで平野彰宛(TEL 330-0065)

申込 5月20日までにbunsui@bunsui.co.jp、またはハガキかFAXで平野彰宛(TEL 330-0065)

AXで諏訪肇宛 (☎ 306-0231 古
河市小堤1383-7 TEL &
FAX 0280-981215

◆カムチャツカ高山植物観察会

やまの自然学研究会

現地ガイドとの高山植物の観察
会とトレッキングです。

日時 7月13日(木)〜20日(木)

集合 13日午後2時 新潟空港

定員 10名(先着順)

費用 31万5000円(全食事付)

別途ロシア査証料必要

申込 6月6日までに、ハガキか

メールで舟根章宛 (☎ 233-0012

横浜市港南区上永谷1-13

13

☎ funane@hlc.highway.ne.jp)

*申込者に詳細を送ります。

◆牧潤一・山と花スケッチ小品展

屋久島のシャクナゲや日本アル
プスの高原の花など、国内の山々
のスケッチ約40点。

会期 5月16日(火)〜21日(日)

11時〜18時30分(最終日は
17時まで)

会場 朝日アートギャラリー(中

央区銀座4-101 TEL 03-

3535-7740)

医療委員会

第26回日本登山医学シンポジウム開催

下記の要領で開催、一般の方もご参加ください。

- 会 期 5月27日(土)〜5月28日(日)
- 会 場 日本青年館中ホール TEL 03-3401-0101
- 参加費 登山医学会会員2000円、非会員3000円
懇親会費4000円

●テーマ

「アジアの登山医学全体を見渡す」
「トラベルメディスンからみた登山医学」
「公募式ヒマラヤGiants登山の功罪」

●特別報告

「クライミングと若年者の骨代謝」
「信頼できる登山医学専門医ネットワーク構築の試み」
「NPO富士山測候所を活用する会からのアピール」

●ゲストスピーカー

過激な山スキーヤー：早川康浩
人類のルーツを探る探検家：関野吉晴
国際登山医学会会長：ジム・ミリッジ
国際山岳連盟副会長：ブッダ・パシュネット

*当日の参加受付可。懇親会は事前に事務局まで。
事務局 了徳寺大学健康科学部 増山茂

☎ jsmm2006@abox2.so-net.ne.jp
URL: http://www016.upp.so-net.ne.jp/JSMM2006/

◆探索山行予告「富士山の植生を 探索する」 科学委員会

日時 7月15日(土)〜16日(日)

問合 末広垣宛 (TEL 03-3428

16802)

*詳細は5月号に掲載します。

◆平成18年度「上高地山研」開所 について

4月で2年目を迎えた内野管理
人、山研委員、開所ボランティア
が雪囲いの撤去や飲料水のパイプ
敷設作業を開始し、オープンに向
けての準備を始めました。

会員の利用(宿泊等)は4月30

日から可能となります。

宿泊予約は30日までは本部事務

局 (FAX 03-3261-4441)

へ、それ以降は直接山研 (TEL 02

63-9512533) に申し込ん

でください。

■訂正とお詫び

3月(730)号9ページ、1段3行、
「1972年」は「1872年」に、
2段2行、「アイゼン」は「登山
靴」の誤りでした。

12ページ、2段25行、「蔡穂楽」氏は
「蔡禮楽」氏の誤りでした。ともに
お詫びして訂正します。

◆編集後記◆

●2月18日に行なわれた「THE
マナスル——過去から未来へ」は、
当時のドキュメント映画「マナス
ルに立つ」が上映されるなど、楽
しみにしていました。ところが、
当日は思ったより出席者が少なく、
盛り上がり欠けて、寂しい感じ
がしました。50年前と比べ、隔世
の感があるようです。こうしたイ
ベントの出席者が年々少なくなり、
登山界に元気がないのが気になり
ます。

●3月から4月にかけては、毎週
のように遭難が続きました。週末
のたびに低気圧に覆われて、山が
大荒れになったことが原因です。
特に春山は周期的に天候が変わり
ます。天気図をチェックして、安
全で楽しい春山を楽しんでもら
いたいものです。(神長幹雄)

日本山岳会会報 山 731号

2006年(平成18年)4月20日発行

発行所 社団法人日本山岳会

〒102-0081

東京都千代田区四番町5-4

サンビュウハイツ四番町

TEL 東京(03)3261-4433

FAX 東京(03)3261-4441

発行者 日本山岳会会長 平山善吉

編集人 神長幹雄

Eメール jac-kaiho@jac.or.jp

印刷 株式会社 双陽社